

サンプル 試読 SAMPLE

美魔女狩り

あんぱらぐ
荒縄工房

シリーズ
完結!

サンプル 試読 SAMPLE

サンプル 試読 SAMPLE

S
M
小説

美
魔
女
狩
り

喜
瀬
満
子
編

あ
ん
ぷ
ら
ぐ
著

荒
縄
工
房
・
発
行

サンプル SAMPLE 試用試読



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より「あんぷらぐど」名義で独自の自虐的S M小説、伝奇S M小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

目次

はじめに	7
主な登場人物	8
プレイ	10
ターゲット	43
攻撃	79
美麗	115
奴隸化	149
陥落	182
逆転	206
確保	241
仮契約	274

地獄巡り	3	0	6
忌まわしい体	3	3	7
千鶴子	3	7	1
咲の悪戯	4	0	5
仕打ち	4	3	9
被害者の会	4	7	6
凌辱の夜	5	1	1
復讐	5	4	7
裏公安	5	7	4
奴隷道	6	1	1
一日目	6	3	9
二日目	6	7	0

三日目	701
四日目と五日目	728
五日目と六日目	765
七日目と八日目	802
九日目、そして十日目	839
最終話	880
余談	933
奥付	934

はじめに

この作品は「美魔女狩りシリーズ」の完結編です。

美魔女狩り 「浅木郁子編」

美魔女狩り 「我妻千鶴子編」に続く作品です。

主な登場人物

藤木祥司 美容師。

阿久まこと 探偵。

松葉かおる スタイリスト

美麗^{みれい} ナース。女優。SMの女王様。

久津木ミキ 女流カメラマン。

喜瀬満子^{きせ みちこ} 弁護士

河野孝江 捜査官。別名「カエラ」。

我妻千鶴子 その娘、咲^{えみ} 『美魔女狩り』 我妻千鶴子

編』参照。

向井 運転手。我妻千鶴子のファン

梶原 フリーライター

福田宗喜

芸能プロ社長

中脇利恵

芸能プロマネージャー

左高さこう

地元ヤクザ。

プレイ

試読用

すらりとした足。黒いスパッツに赤いレスリングシューズ。格闘をするには細すぎる足だが、鞭のように空中でしなると、膝が先に水平に動き、ついでシューズの甲の部分が一瞬で、剥き出しの脇腹に食い込んだ。

「あはっ！」

小麦色の肌をした、小柄ながらもがっしりとした体型の女性が、サンドバッグのように鎖で天井から吊られている。手首はその鎖をしっかりと握っている。宙に浮いた足には鎖が巻き付き、重石としての水を入れたタンクにつながっていた。

「どう？」

回し蹴りをしたのは、長身でスリムな女性だった。小刻みにステップを踏みながら、次の蹴りを狙っている。

「上達したわ」とサンドバッグが答えた。

「すごく、的確だった……」

「そう？」

「ええ。満子様がもし、私ぐらいの筋力と体重があったら、間違いなくダウンしたわ」

「あら、そう？ 効き目はいまいち？」

「十分よ。同じ体重の男よりはキツイ」

汗だくの間人サンドバッグは、筋肉質ながらも魅力

的な乳房の持ち主だった。

広い庭に差し込む冬の陽光が、部屋の中まで差し込んでいる。空気を入れ換えるために細く窓を開けているが、室内の熱気はその程度では下がらず、窓の一部が曇っていた。

肌のかもしだす甘い香りが充満している。

喜瀬満子きせみちこは、ファイティングポーズをとると、さらに足を高く上げて回し蹴りを繰り出した。

「あふっ」

小麦色の乳房を、レスリングシューズのつま先がかすめた。

「ああ、お願い。そこは急所だから……」

「コーチ。ちゃんと教えて。もう少し上を狙うときはどうするの？」

「うううう」

吊された女は、自身の急所を蹴る方法を、満子に教えなければならぬ。

「た、高い場所を狙うときは、もう半歩、踏み込まないとだめ。頭部なら後頭部を狙うぐらいに深く踏み込まないと届かないわ。試しに、蹴りたい場所に足をかけてみて」

クールな微笑を浮かべた美しい顔立ちの満子は、一歩踏み出し、静止して左足を高く上げていった。シューズの甲の部分を、犠牲者の右の乳房の横にあてた。

「こんな感じ？」

「そう……。深くえぐるぐらいの距離じゃないと、相手もとつさに避けるのだから、当たらないわ」

「じゃ、やってみるね」

「えっ」

脅える彼女にかまわず、満子は元の位置に戻り、構えると、絶対に反撃してこない相手であるにもかかわらず、ボクサーのようにリズムカルに体を揺らしながら接近し、正確にさつき計測した位置に軸足を踏み込むと、いつきに左足を蹴り込んだ。甲の部分が乳房の横に食い込む。

「ぎゃー」

悲鳴。そして鎖がチャラチャラと鳴った。

その感触を確かめるかのように、今度は右足で左の乳房を蹴った。少し遠く、つま先が乳首の横をかすった。

それが悔しかったのだらう。満子は連続で回し蹴りをし左の乳房を蹴り上げた。

「がはっ」

吊された女は一瞬、息もできなくなり、天を仰ぎ涎を垂らした。

「さすがね。孝江ちゃんは、このぐらいじゃ失神しないのね」

満子は孝江と呼ばれた女の乳房を、指で確かめる。

「少し赤くなつてゐるだけよ」

衝撃を受けた部分が腫れている。

そしていきなり、呼吸も満足にできていない孝江の唇を吸つた。

満子の唇は薄い。一方、白目を剥いている孝江は、情熱的な分厚い唇をしていた。

「今日のレッスン、ステキだったわ、先生。次は膝蹴りを教えて。いやらしいことをしてくる男を悶絶させたいの」

「は、はい」

孝江はようやくやく答えた。

満子は彼女の足を自由にしてから、丈夫な木製のイ

スにのって、天井から下がる鎖を解いた。大きな南京錠で留められていたのだ。

床にへたり込む孝江を、「スキあり！」と子どもものように叫び、イスから飛び降りながら拳を打ち込もうとした。

通常の間人なら、その小さいとはいえ鋭い拳を、まともにくらっただろうが、孝江は一瞬で避け、素早く立ち上がるとイスを盾にしていた。

満子はパチパチと拍手する。

「すごい。さすが公安警察ね」

「やめて」

孝江はその場で床に正座した。そして土下座した。

「満子様。ありがとうございます。お願いですから、孝江のいやらしいまんこを罰してください」

「え？ 欲しいの？」

「はい。お願いですから」

「じゃ、なにかおもしろい情報と引き替えなら、あげてもいいかな」

ショートヘアの満子はタオルで汗を拭い、テーブルの上にこれみよがしに置かれたピンク色のペニスバンドを手にした。

「欲しい？」

「お願いします」

その亀頭部分を差し出すと、孝江は唇をあてて、情

熱的に舐め始めた。舌使いで満子を挑発する。

「情報が先よ」

「先日、満子様が、お友だちの我妻千鶴子様と娘の咲えみ様のことを心配されていましたけど、ちよつと情報が
あります」

「へえ。そうなんだ」

満子はあまり興味がなさそうに、ピンクの玩具を孝江の口に押し込む。スムーズに喉まで達する。

「情報によつて、まんこがいいか、アヌスがいいか、
決めましようね」

首を横にふる孝江。アヌスは苦手なのだ。

「言つてごらん」

引き抜くと、咳込み、ドロツと涎が垂れた。

「ご心配されていたように、突然、仕事の内容が変わった背景には、事務所との間に急な契約更改があつたようです」

「美魔女を売りにして、裸になる契約を彼女がしたつて言うの？ しかも母娘ともどもよ。彼女のファンだった女性たちが、なんと言ってるかわかる？ 鬼畜母子とか変態親子呼ばわりしているわ」

「お金が原因では？」

「彼女はお金持ちなのよ。最近、亡くなった大堀って政治家と結婚していて、咲ちゃんはその実の子じやないの。十分な養育費が出ていたはずだし、政治力を使

ってテレビ番組のコメンテーターの仕事を抱んで大成
功していたわ。放送局は大堀の力もあつて、破格のギ
ヤラを出していたと聞くわ。なぜ裸になる必要がある
わけ？ ファンを失つてるのよ。バカげてるでしょ。
彼女はバカじゃない」

「娘をデビューさせる引き替えじゃないでしょう
か？」

「そんなバカな。娘こそ直系の政治家の娘なのよ。彼
女は望めばなんだって仕事を得られたでしょう。政治
家にだってなれたわ」

「ええ。でも、もし二人が望んだとしたら？」

満子は、ローションを手に取り、ペニバンに垂らし

て見せる。ただし、ほんのちよつとだけ。

「もしかして、千鶴子も孝江と同じってこと？」

「かもしれせん」

「驚いたわ。もしそうなら、素敵だわ。咲ちゃんも可愛い。あの親子はすごくキレイなもの。おっぱいも大きいしね。欲しいわ」

「あと一つ」

「なに？」

「親子は美容師で、少し名の知られている藤木祥司と深い関係にあるようです。娘の咲は、藤木の店で働いていた松葉かおるというスタイリストと同棲しています。ただ、藤木と我妻親子が所属する芸能事務所には

とくに関係は見出せません」

「すてきだわ。なにかありそうね、すごい秘密があったりしてね。気に入ったわ、この話」

満子はスパッツの上からペニバンを手早く装着した。孝江は慌てる。ローションが足りない。せめてその先端をツバで濡らそうとするのだが、振り払われて、後ろを向くしかない。

「お尻を高くあげなさい」

冷たい表情で満子が命じると、孝江は足を広げて伸ばす。

「生まれたたての子鹿ね」と満子が笑うのは、足が緊張と期待で震えているからだ。

「さあ、どつちがいいかな？」

「まんこにお願いします！」

「そうね。じゃ、そうするわ」

指先を割れた性器に這わし、二本の指を中にすべらせる。

「熱いわね」

「お願いします」

そこにペニスに模したピンクのシリコン製の器具を突き入れた。

「はあああ、ありがとうございます、満子様！」

「でも、やめた」

すぐ引き抜いて、いつきにアヌスに突き入れた。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二二年八月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。